

新年礼拝

新年あけましておめでとうございます。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

お隣り、前後ろの方々にも、ちょっとこう挨拶いたしましょうか。

はい、では、賛美を共に献げていきましょう。

聖歌 584 です。

「神に勝った人？」

創世記 32 : 22 - 32

ヨハネの福音書 15 : 4 - 9

January.1.2023

**創世記 32 : 22 - 32**

**ヨハネの福音書 15 : 4 - 9 (パワポ)**

### Preface

2023年の主題聖句は、創世記 32 : 28 の御言葉とヨハネの福音書 15 : 4 の御言葉を合わせたものと致しました。

壁に掛けられていますので、一度、皆で声に出して読んでみましょう。  
(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでみてください。)

**「あなたの名はもうヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる。**

**あなたは、神と人と戦って勝ったからだ。**

**だから、わたしにとどまりなさい。」 (パワポ)**

創世記 32 章のヤボクの渡しにおけるヤコブの神との格闘の場面も、ヨハネの福音書 15 章のイエス・キリストがぶどうの木で私たちが枝であるというイエス様の例え話も、聖書の中では比較的有名な聖書箇所ではないかと思えます。

そんな二つの聖書箇所が、2023年の主題聖句を考えていく中で、私の中で繋がってしまいました。

誰かの話や何かの神学書や本などを通して教えられたものではなく、ただ純粹に聖書を読み黙想していく中で、二つの御言葉が繋がってしまいました。

そして、「この気付かされた御言葉同士の繋がりを、私個人の気付きとして留めて置くのではなく、聖霊様が気付かせてくださった御言葉の恵みなのだから、共に分かち合っているものではないだろうか」と思わされました。

ただ私の思い違いではいけないので、2ヶ月近くその思いを私の内にそっと寝かせておきながら時を過ごしたのですが、主題聖句として他の聖書箇所が与えられると言いましょうか、思いつくところがありませんでした。

そこで、創世記 3 2 章の御言葉とヨハネの福音書 1 5 章の御言葉を繋げたものを主題聖句としようと思案いたしました。

### Part One

先程も話しましたように創世記 3 2 章の御言葉もヨハネ 1 5 章の御言葉も共に有名な聖書箇所、私自身も当然何度も目にし、読み、メッセージを聞き、メッセージをしてきましたが、今回、事新たにこれらの御言葉に出会ったような気が致しました。

特に創世記 3 2 章のヤボクの渡しにおけるヤコブの神との格闘の場面について、実感の伴う気付きがありました。

これまで何度もその解釈やメッセージを聞き考えてきた聖書箇所ではありましたが、頭では分かるけれども、なんかこう実感が伴う分かり方ではなかったような気がしていました。

ですが、今回この御言葉を黙想していると、「ああ、そういうことかもしれない！」と事新しく気付かされることがありました。

それは、私が、私たちが直面するありとあらゆる問題は、その問題自体やその問題に関わっている人たちが問題の本体ではなく、私が神様とどういう関係にあるのか、私たち一人一人が神様とどういう関係を持っているのか、神様をどう理解しているのかが、あらゆる問題の本質ではないだろうかということです。

だからと言って、「やれることややるべきことをせずに、神に信託しているからただじっとしていればいい」ということではなく、「物事すべてを神様事として捉えることが出来ているだろうか、問題のその裏側・本質にある私と神様との関係、神の前に出て行き、神の御声、御心を聞こうとしているだろうか」ということを語り掛けられたような気が致しました。

私たち日々、色々な問題を抱えながら生きています。

経済的問題、人間関係の問題、仕事や職場の問題、進路の問題、家庭の問題、夫婦や兄弟の問題、肉体や精神の問題、恐れや不安の問題、そして信仰の問題等々色々あると思いますが、結局それらすべて、私と神との関係が問題の本質ではないだろうかということを実感をもって、この創世記 3 2 章の記述から教えられた気が致しました。

正月早々、こんなため息のようなことを言って申し訳ないのですが、「生きて何でこうも辛いだろうか？」と思いませんか？

これは、私自身の人生における正直な感想でもあります。

そして、創世記 3 2 章のヤコブも同じような感想を持っていたらうことを、私自身の実感も伴って、この御言葉に内包されているヤコブの思いを事新たに感じました。

今、ヤコブは、人生で二度目の最大のピンチに合っています。

ある意味一度目のピンチよりも、比べものにならないくらい規模が大きく、下手すると自分の命ばかりか、20年間一生懸命蓄えてきた膨大な財産と4人の妻たちと12人の息子娘たちすべてを死なせてしまうかもしれないというピンチに直面しています。

20年前ヤコブは、実の兄エサウに殺されてしまうかもしれないというところから、着の身着のまま杖一本持って親元を離れ、900km離れた母方の叔父ラバンのところへと逃げて行きました。

今のように電車や車があるわけでもなく、舗装された道に行くのでもなく、いつ日中の熱さと夜中の寒さの気温差に体が滅入ってしまい、または野生の獣や盗賊等に襲われてしまうかもしれない危険に取り囲まれながら、無事辿り着けるのかも分からない保証もない旅の不安と恐れという人生最初のピンチに晒された時、主なる神様が現れて下さり（創世記28章の内容ですが）、「わたしはあなたとともにいて、あなたがどこに行ってもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る」と約束して下さいました。

そしてその約束通り、叔父ラバンのところで辛いことも多々ありましたが、守られ、杖一本しか持っていなかったヤコブは、大家族と膨大な財産を手にして、故郷に帰って行くこととなりました。

正に20年前のあの神様の約束通り、ついに故郷に帰ることとなったわけです。

ところがです。

十分に故郷に錦を飾れるような内容を持ち合わせるほどになったヤコブですが、20年前のあの恐れ、兄を騙して長子の権利を奪ったという身から出た錆ゆえに命狙われるようになってしまったあの実の兄エサウの尋常ではない殺意が、突如として思い出され、その殺意による恐れに心が支配されてしまいました。

20年間無かったこととして考えたかった、または、遠い過去の記憶として心のどこかにそっとしておいたあの恐れ、もう癒えたものだと思いたかった過去の過失、「20年も経ったし、今は家族もいて、人生経験も積んで、故郷に錦を飾れるような人になったんだから、堂々と胸を張って帰ればいいんだ」と自分自身に言い聞かせはするものの、自分だけでなく相手のあることですから、相手である兄の心情を思った時、「そりゃ、赦せないよな...」と思ったのかもしれない。

兄エサウの怒りの気持ちが想像出来、知らなかったこととして、または無かったことのようにして心の奥底にしまっておいた思いが、恐れとなって目の前に現実となって突きつけられました。

ただここで、恐れに駆られているという状況を違った側面から見ますと、ヤコブに人格的・人間的成長が見られることが見えてきます。

20年前には分からなかった兄エサウの怒りの気持ちが想像出来るようになった、分かるようになったということです。

対価の伴う労働の大変さ、人に騙され利用され、良かった人間関係が悪くなってしまふ等の苦汁をなめる経験、家族と共に生きていくことの喜びや悲しみや責任等の経験を通して、エサウの怒る気持ちが20年前は理解出来なかったのに、今はその気持ちが想像出来るまでになりました。

神様の人に対する目的は、いつもこういうところにあります。

人の作ったこの世界で生きていますと、事が上手く運ぶようになることとか、認められるようになることとか、成果を上げるようにとかという目に見える表立った結果が求められ、その結果をもって幸福とか成功だとかを判断しようとしてしまいますが、

神様の意図、神様が人に対して期待し、人に対して働かれる内容は、いつも内なることです。

つまり、人の痛みが分かるようになったとか、その悔しさに同感できるようになったとか、赦すことが出来るようになったとか、先にごめんなさいと言えるようになったとか、物事の奥にある神との関係に目を向けることが出来るようになったとか、他者を愛すとか言っておきながら実のところ自分のことしか愛していない自らの現実を認めることが出来るようになったとか、神の恵みが恵みだと思え、キリストの愛が愛なんだということが事あるごとに生活に表れるようになったとか、正し過ぎることの偽善さに気付けるようになったとか等々、至って内的、内面的な、霊的なことにこそ、神様の意図や思いがあります。

そのようなことをもって、神様は人を神の前に導こうと、神の前に評価され、神の前に立つ者としようとしておられるということです。

20年前は分からなかった兄の痛みに共感出来、想像出来るようになったからこそそのヤコブの恐怖心であり、神の御手から見れば人として成長し成熟している過程にあるように思えますが、当の本人にしてみれば、今、目の前にある現実には恐怖でしかありません。

むしろ、その人生経験が、恐怖を増長しているようにも見えます。

どれほどの恐怖を覚えたかと言いますと、自分の全財産や家族までも盾にしてしまうほどの恐怖でした。

### 創世記 32 : 21 - 24 (パワポ)

ただの恐怖としてしか目の前の現実が映っていないヤコブに、神様が人のかたちをとって現れなさり、格闘を仕掛けて下さいました。

つまり、「あなたのその恐怖心はあなただけのものではなく、わたしが深く係

わっていることなんだよ」ということを気付かせるための格闘ですね。

ヤコブの視点・視線を、神の視点・視線に変える格闘です。

恐怖ではなく、神様が共にいて下さっている祝福の人生の途上にある出来事だという視点を与えるための格闘です。

よくこのヤコブの渡しの格闘の場面は、ヤコブが神様に熱心に祈ったら、神様が祝福して下さったと解釈されたりもしますが、もちろん、それも間違っていないと思いますが、そういうヤコブの積極的な祈りの姿勢というよりも、分かっているヤコブの視線や人生における視点を改めさせる神様からの激しくも、かなり積極的で攻撃的な働きかけだとみる方が妥当だと思うんです。

### Part Three

今この創世記 3 2 章の時点で、ヤコブの中にどういう思いがあるのかと言いますと、「こんなはずじゃなかった！ 神様は僕を幸せにしてくれると思っていたのに、幸せどころか、家族全員無惨にも怒りに駆られた兄に殺されてしまうかもしれないこれ以上ない不幸を被ってしまう！ 冗談じゃない！ 神様は僕のことを幸せにしてくれると言ったじゃないか！」という思いです。

ヤコブの祈った祈りを見ますと、この思いが良く表れているのが見えてきます。

#### 創世記 3 2 : 9 - 1 2 (パワポ)

一見すると、このヤコブの祈りは、ヤコブに神様が仰って下さった約束の言葉に裏打ちされた祈りの言葉のように見えますが、実のところ神の思いとヤコブの思いがすれ違っている祈りとなっています。

この祈りの中で 2 回同じ言葉が繰り返されていますが、それは、9 節の『わたしはあなたを幸せにする』と言われた主よ」という言葉と、1 2 節の「あなたはかつて言われました。『わたしは必ずあなたを幸せにし』』という言葉です。

ところが、神様はただ一度も、ヤコブに「あなたを幸せにする」なんて言ったことはありませんでした。

20 年前、着の身着のまま杖一本持って旅立たなければならなかった人生最初のピンチにあったヤコブに対しても、また 20 年後、叔父ラバンのところを旅立つ時のヤコブに対しても、神様は、「あなたを幸せにする」なんていうことは、一言も仰いませませんでした。

まずは 20 年前の神様の言葉を見てみましょう。

#### 創世記 2 8 : 1 4 - 1 5 (パワポ)

20 年前、神様は確かにヤコブに対して、「わたしはあなたとともにいて、あ

あなたがどこに行ってもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る」と約束して下さいましたが、「あなたを幸せにする」なんてことはひと言も仰いませんでした。

その代わりに、「あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」と仰られました。

では、どんな約束なのか？ 14節

### 創世記28：14（パワポ）

14節、「地のすべての部族が、あなたの子孫によって祝福される」という約束です。

ここにある「子孫」という言葉は言語を見ますと、単数であって複数ではありません。

つまり、ヤコブの腰からこれから生まれてくるだろう無数のイスラエル民族を指す言葉というよりも、究極的には、イスラエル人の子孫としてお生まれになった神のかたちなる救い主イエス・キリストのことを指す言葉だと解釈できます。

要するに、「地のすべての部族が、あなたの子孫によって祝福される」という約束の言葉は、イエス・キリストを通して全人類に祝福が宣べ伝えられるという意味ですね。

この言葉を、ヤコブは「自分が考え、望み、願ったような幸せが与えられること」、「自分の願っているような富や名誉や楽しいことや嬉しいことや喜ばしいことをお与えくださる」と誤解と言いましょうか、勘違いをしたわけです。

その後、20年間小作人として働かされた後、ラバンの家を立つ前にも神様が現れなさり、言葉をかけて下さいましたが、その言葉の中にも、「わたしがあなたを幸せにする」とは一言も仰いませんでした。

### 創世記31：3（パワポ）

「わたしはあなたとともにいる」

神様がここで語られたことも、イエス・キリストの呼び名であるインマヌエルを連想させる言葉ですし、「わたしはあなたを幸せにする」とは一言も仰いませんでした。

2000年前イエス様がお生まれになった時、ヨセフに現れた天使がイエス・キリストについて言った言葉が正に、「わたしはあなたとともにいる」という言葉でした。

「ご自分の民をその罪からお救いになるためにお生まれになる救い主は、『神が私たちとともにおられる』という意味のインマヌエルとお呼ばれになる」と天の御使いが宣言しました。

つまり、ヤコブは、神様が成そうとしておられる良きわざの通り良き管として用いられる人生であって、彼が願うような人間的な、世的な、社会的な幸いを手にするためではないということです。

もちろん、その人生は、何にも代え難い、比類なき天上のすべての祝福を頂く人生でありますから最高の幸せを経験する人生であります。私たち人間の、またヤコブの願うようなものだったり、道筋だったりではないことの方が遥かに多いことでしょう。

なのに、自分にお語りくださった神の言葉を自分の都合のいいように捉えて行ってしまい、「こんなはずじゃなかった！」と怒り、駄々をこね、神様ご自身がお約束して下さった通り、片時も離れず共にいて下さっている神様のことはきれいさっぱり忘れてと言いましょうか、覚えることが出来ずに、恐怖に駆られ、一人怖惑っているヤコブに神様が現れ、格闘を仕掛けて下さり、力づくでヤコブの視線を神様へと向けさせてくださっているのが、このヤコブの渡しの出来事です。

#### Part Four

このヤコブの姿を見ていると、誰かの姿を見ているようではありませんか？

私たちです。 正に私たちの姿です。

キリストの十字架により罪赦され、「全世界を手に入れてもまことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう」と言われるほどのまことのいのちを、全世界を手に入れることは比較にならないぐらいのものをもう既に恵みの内に与えられているにもかかわらず、無いものだらけのように感じて仕方がない、あれも無いしこれも無い。

私たちをキリストの愛から引き離すものなんか何もないですし、そんなものは存在し得ず、私たちはキリストにあって圧倒的な勝利者」なのに、お金がないことを恐れ、目の前にいる人を恐れ、高いところを低いところを恐れ、今持っている沢山の物、健康、人脈、功績、実績、知識、経験について、「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」なんていう賛美や告白なんか一切出で来ず、「何ですか！ 何でなんですか！ ふざけないでください！」という思いや憤りばかりが出て来ってしまう。

そんな私たちの姿とヤコブの姿は同じです。

そんな私たちに現れなかり、格闘を仕掛け、しかも「あなたは神と戦って勝った」とまで仰って下さる愛に満ちたもう、赦しに満ちたもう、恵みに満ちたもう、忍耐と寛容に満ちたもう神様のお姿が、ヤコブと戦ってくださった神様です。

そしてもう一度、ヤコブの視点を神の視点へと戻してくださるのが、ヤコブの



渡しの話ですね。

この創世記 3 2 章のヤコブと神様の格闘を読みますと、誰もが「はて？」となる疑問が湧いてきます。

それは、ヤコブは、この格闘に明らかに負けているのに、「神に勝った」と勝利宣言をされているところです。

### 創世記 3 2 : 2 4 - 3 2 (パワポ)

人間の筋肉の中で最も大きいものつがいを打たれて足を引きずるようになってしまったヤコブは、この神との格闘の敗北者なはずですが。

なのに、神様は、「あなたは神と戦って勝ったから、もうヤコブではなく、イスラエルだ」と宣言されます。

ヤコブという名前の由来は、よくこんな意味を持つ名前を親は付けたなあと思います。が、「掴む、離さない、強いては、奪う、略奪する」というような意味を持つ名前ですが、決して手放そうとしなかったヤコブの願う幸せやヤコブの願う祝福という土俵において神様は、ヤコブに勝つ気なんか全くありませんでしたので、そんな人間的な食欲の戦いにおいては、「あなたに勝つ気はない」とあっさり敗北を認めます。

しかし、ヤコブのその神の目から見て間違った価値観だったり、視線だったり、視点を変える戦いにおいては、もものつがいを打って打ち負かすという方法で、神様が圧倒的に勝利されます。

それなのに、神様はヤコブに、「あなたは神と戦って勝った」と言って下さるんです。

これこそが、突き詰めていきますと、私たちクリスチャンが受けている祝福であり、幸せです。

ヤコブは、「私はあなたを祝福して下さるまで、決して去らせるようなことはありません」と、自分の願う祝福・幸福を願い求めますが、そんなヤコブのもものつがいを打って倒し、「いや、違う。わたしがあなたに与えている、与えようとしている祝福は、あなたの食欲を満たすためのものではない。永遠に関することだ」と、ヤコブに気付かせようとされるんです。

そして、「あなたはもうこれ以上、自分の願う幸せを握り締めることを目標にする人生を歩むのではなく、神にその間違った肉眼的な視線を霊的な視線へと変えて頂く、事あるごとに神の激しい程に思えるご介入を経験しながら歩む人生を生きていくんだ。あたかも、神に挑まれた戦いを戦わせていただきながら、負けるはずもない神からの勝利宣言までして頂きながら、生きていく人生なんだ」という宣言が、「あなたは神と戦って勝った」という言葉の意味合いです。



神と戦って勝てる人間なんかどこにもいません。

でも神様は、ご自身との戦いにおいて、私たちに勝利宣言を下さるんです。子どもと相撲を取って、「ああ〜」と言いながら、倒れてくれるお父さんのようだとしたら神様に失礼でしょうか。でもそうですよね。

また何よりも、このことは、イエス・キリストにある罪からの解放、赦し、勝利を連想させる言葉でもあります。ローマ書3章に行ってみましょう。

## Part Five

**ローマ人への手紙3：10－24 (パウロ)**

**ローマ人への手紙8：34－39 (パウロ)**

人は誰も彼も一人残らずきれいさっぱり、罪人です。

この罪ゆえに、どんなに人間が作ったこの世界で勝利しようが、打ち負かそうが、敗北者として死を迎え、世々限りない滅びへと誘われて行く宿命です。

死を前にして、人は無力です。

しかしこの罪による敗北が、イエス・キリストの十字架の贖いを信じる者には、信じるようにされた者たちには、全く関係のないものとなります。

むしろ、イエス・キリストの十字架によって、圧倒的な勝利者です。

神様がヤコブに、「あなたは、もうヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる」と仰ったあの言葉の意味と同じですね。

「あなたは肉的な幸せを目標に生きる滅びゆく人生から、霊的な幸せを目標に生きる永遠へと続く人生へと変えられたのだ」という勝利宣言の元生きていく者へと変えられました。

「それを忘れちゃいかん！」と、「神がともにいて下さっているインマヌエルを忘れてはいかん！」という勝利宣言です。

「あなたは、もう自分の願う幸いをもって幸いとする者ではなく、神の願う幸いをもって幸いとするまことの祝福を望みながら、生きる者と変えられた」という宣言ですね。

そして、ここで、ご自身をブドウの木と私たちをその枝に例えたイエス様の言葉に繋がるんです。

「だから、わたしにとどまりなさい。」

イエス様のこの語り掛けに、皆さん、この1年間どう答えて行かれますか？最後にホセア書12章の言葉を見てみたいと思います。

## Conclusion

**ホセア書12：3－6 (パウロ)**

神と戦って神に立ち返ったヤコブのように、今私たちは、神に立ち返り、神の御言葉を守り、たえず私たちの神を待ち望まなければなりません。

万事に神を見出す努力を惜しまないようにするんです。

どんな問題の中にも神がともにいて下さり、神と私たち一人一人の関係が、問題の本質であることを忘れないようにするんです。

今、私たちは、新しい年を迎えておりますが、神様はこの新しい年を私たちに贈り物として下さっております。

この1年間何が起こるのかは私たちには分かりません。

はたまた、主イエス様の再臨がある年なのか、そうでないのかも分かりませんが、私たちが信じるイエス・キリストの神様は、「見よ、わたしは全てを新しくする」と仰りながら、新しいことをなさる神様でもあります。

それゆえに、この神様にとどまることをもって、新しく始める機会をお与えくださる神様に期待しながら、神の願っておられることが出来ればなあと思いません。

ヤコブが神と戦って新しく始めたように、私たちも神と格闘させていただきながら、新しいことを期待していきたいと思えます。

お祈りいたします。

祝祷：「あなたの名はもうヤコブではなく、イスラエルと呼ばれる。

あなたは、神と人と戦って勝ったからだ。

だから、わたしにとどまりなさい。」